

平成 26 年度 海外臨床薬学研修報告書

「求められる職能に応じた薬学教育と薬学制度」

研修期間：平成 27 年 2 月 21 日～3 月 8 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

100973313

大口裕美

平成 27 年 2 月 21 日～3 月 8 日の約 2 週間、アリゾナ大学薬学部における海外臨床薬学研修に参加した。以前大学の講義にて、米国の薬学教育制度は臨床に力を入れていると耳にしたことがある。私は、特別臨床研修（アドバンスト研修）を専攻しており、今回の研修を通して、病院・薬局の見学を通して日本と米国の薬剤師の相違を知ることや、早期から臨床教育を受けている米国の薬学生と関わることで現在の自分に何が不足しているのかを学びたいと思い参加した。

研修内容は、薬学生の講義への出席や私たち研修生を対象とした個別講義、隣接する医学部の病院見学、CVC Pharmacy（薬局）見学、レジデントプレゼンテーションなど、基礎講義から臨床現場見学まで多岐に渡った。

病院見学では、午前中に行われる回診に医師や薬剤師、薬学レジデント、薬学生とともに同行した。まず始めに、カンファレンスを行い患者の状態や治療について話し合いその後、各患者への面談を行った。病棟業務の一連の流れや、カルテより患者状態や検査値を把握するという点については日本と差がなかったが、薬物治療に対してガイドラインや検査値など根拠を示しつつ次々に提案したり、不明点をすぐに解決したりと日本の薬学生と比較して、薬学生のうちから薬剤師としての責任感を強く持ち、積極的に薬物介入が行われていることが分かった。日本の薬学生もガイドラインなどを用いて薬物治療を行う技能は身についていると思う。しかし、米国の学生と比較すると、薬学生の発言の場が少なく、薬剤師に同行してその様子を見て学ぶ傾向が強いように感じた。薬学生のうちから、自らの意見に自信を持って伝えられる訓練や環境作りが必要であると思った。

次に、CVC Pharmacy（薬局）見学では、薬局薬剤師の業務内容や米国の薬学制度の違いについて説明を受けた後、陳列された OTC 医薬品の見学をした。米国の薬局ではテクニシャンが調剤を行い、薬剤師は主に鑑査や服薬指導に従事していることが分かった。また、処方箋の中には、FAX や直接持参するものではなく、医師からの口頭処方箋があることを知った。薬剤師とテクニシャンが業務を分担することで、薬剤師が調剤に追われることなく、鑑査や服薬指導などの薬剤知識をより必要とする業務に専念することができ、安全面が確保されるだけでなく患者からの信頼度得ることができると考えられる。この背景には、米国の薬局の 1 日処方箋枚数が約 400～600 枚と日本と比較してかなり多いことが挙げられる。日本の薬局では米国の処方箋枚数に達する薬局は少ないが、医薬分業が進み、院外処方が増加していることを考慮すると、日本にもテクニシャンの制度を導入することもこれからの薬学制度に必要なかも知れないと感じた。

これらの臨床現場の見学などから、薬学生の知識や意欲の高さや、薬剤師としての職能が確立されていることを感じ、米国における薬学生や薬剤師の特徴を知ることができた。この背景には、米国の薬学教育が関連していると考えられる。講義にて、アリゾナ大学における実務実習の制度を学んだ。Pharm.D（Pre-Pharmacy 卒業後の薬学課程）1 年目から週 2 時間の臨床実習が開始され、2、3 年次には病院と薬局での各 120 時間の臨床実習、4 年次には 7 か所での臨床実習が各 6 週間規定されている。私たちの実習期間は 5 年次から、

病院と薬局の各 11 週間だけであり、実習開始時期や期間の差がかなり大きいことが分かった。早期から実際の臨床現場に触ることは、現場で薬剤師に必要とされていることを身をもって体感することができ、今後の学習意義を考える上で大変よい機会になると思った。また、長期間の臨床実習を行うことで、臨床で求められる知識やスキルを身に付けることができ、卒業後すぐに現場の即戦力となれるように感じた。日本では卒業後、製薬企業や公務員などの幅広い進路を選択するため、一概にどちらの国の教育制度がよいとは言えないが、将来臨床で働きたいと考えている私にとって、米国の教育制度はとても魅力的であった。

約 2 週間という短い期間の研修であったが、講義や臨床見学、薬学生との情報共有など多くの体験ができ、想像以上のものを得ることができた。米国と比較して日本の薬学教育は臨床教育に重きを置いていないことが分かったが、名城大学のようにアドバンスト研修を設け、それを学びたい学生が専攻するという形式は、研究分野から臨床分野まで幅広い薬剤師を育成する日本の薬学制度にとてもふさわしいと感じた。今後、より多くの大学にアドバンスト研修が取り入れられれば、日本でもより質の高い臨床薬剤師の育成につながるのではないかと思う。私は、アドバンスト研修生として臨床現場を学ぶことができる環境にいることに感謝し、残りのアドバンスト期間を大切にしていこうと思った。今回の研修を通して、米国の薬学生より知識や考察力が少ないことを痛感したため、もっと自己学習を増やし、残りのアドバンスト研修にて、どのような薬物治療ができるかをより深く考えていこうと思った。

最後に、海外臨床薬学研修という貴重な機会を与えて下さったアリゾナ大学や名城大学、関係者の方々に深く感謝をし、今回の研修で学んだことや思いを忘れずに、医療に貢献できる薬剤師を目指していきたい。